

命の教育フォーラム 開催記録

1 日時

平成21年2月14日（土） 午後6時から午後7時30分まで

2 場所

ウィルあいち（愛知県女性総合センター）4階 ウィルホール（名古屋市東区）

3 プログラム

《講演》 〈演題〉 「生きる力 — 生命の尊さ — 」
〈講師〉 小菅 正夫 氏（旭山動物園園長）

4 参加者数

約500名

5 内容（要旨）

《主催者あいさつ》 愛知県県民生活部長 石川 延幸

本日は「命の教育フォーラム」に御参加をいただきありがとうございます。

家庭、学校、地域など、子どもたちを取り巻く環境が変化する中で、今の子どもたちは、命の大切さや他人への思いやり、さらには善悪の判断などの規範意識が低下してきていると言われております。

こうした中、命のかけがえのなさ、自信や夢を持って生きることの大切さなど、人間形成にとって欠くことのできないものを育むことがますます重要になってきております。

本日は、はるばる北海道から旭山動物園園長の小菅正夫さんをお招きいたしました。様々な動物との関わりの中で経験された「命」に関する貴重なお話をたくさん伺うことができると思います。

本日のフォーラムが、「命の大切さ」や「生きることの意味」について皆さんと共に考える場となり、人への思いやりや生命を大切にする心の輪がますます広がることをご期待申し上げます。



《講演》 「生きる力 — 生命の尊さ —」 小菅 正夫 氏

○ 生物はすべて決まった形をしている

命あるものは皆、決まった形をしています。例えば、葉っぱ見て、これは「いちょう」だとか「もみじ」だとわかります。いろいろな形があってもよいのに、みんな同じ形をしています。

同じように、人間は人間の形をしています。チンパンジーの毛を全部剃り直立させて服を着せても、彼らは人間にはな



れません。生物は決まった形をしており、その生物らしく生きていくものなのです。

現在、地球上に現存している生物は約二百万種と言われますが、すべて種ごとに特殊な形をしています。では、どうして形が決まっているのか。それは、その形がその種が暮らす自然環境の中で生きるのに有利だからです。裏返せば、その形でなければその自然環境の中では生きていけないということです。

では、生きていくために有利であるとはどういうことなのでしょう。生物が生きていくためには、まず第一に、生きていくためのエネルギーを得ること、即ち「食べること」が必要です。しかし、いくら食べていても必ず死にます。ですから、死ぬ前に命をバトンタッチすること、即ち「繁殖すること」が必要となります。この「食べること」と「繁殖すること」の二つが生物の最大の目的です。つまり、生物の形は、「食べること」と「繁殖すること」のために有利な形だということなのです。

この種ごとの形は、種ごとの「能力」と言い換えることができます。その能力が可能になるような形を取っているということです。そして、この生物が持っている能力は、各個体が自分で努力して獲得した能力ではなく、長い進化の過程の中で獲得された、その種のすべてが持っているものなのです。

○ 能力を発揮すること

動物園で飼育されている動物は、することがないので、生きていくことがつまらないのです。私は若い頃に猿山を担当していましたが、餌を与える時に、食べやすいように切り分けて与えていました。すると、猿たちはあっという間に食べ終わってしまい、その後は退屈な時間が延々と続くのです。

こうした状況をなんとかしなくてはいけないと思ったのが、今の旭山動物園の活動につながっているのです。

旭山動物園では、猿山に麦などの種が蒔いてあり、その芽をむしって食べるようにしてあります。また、ピーナッツを与える時も、小さな穴が開いた箱に入れて与えるので、一生懸命努力して出そうとしなければ手に入らないようになっています。餌を置くときも、毎回同じところには置かず、量も毎回異なります。餌が毎回同じところに、同じ時間に、同じ量があったら、猿たちは全く面白くないのです。旭山動物園では、猿たちは自分が一日に必要な餌を、様々な方法で獲得することができるようにしています。自分の能力を使って試行錯誤しながら、自分が一日を生きていく餌を獲得する。これはまさに野生と同じ状態なのです。

自分の能力を発揮し、餌を自分で探し、自分で見つけ、自分で取り、自分で食べる。その時の餌のおいしさは格別です。きれいに切り分けられた餌よりも、自分の力で獲得した餌の方が確実においしいのです。皆さんもぶどう狩りやりんご狩りなどで経験したことがあると思います。これは生物すべての一致した気持ちであり、これがまさに生きている実感なのです。動物園はこれまで、そうした動物への気配りに欠けていたのだと思います。



○ 命を意識する瞬間

さて、命とは何でしょうか。命は見ることも触れることもできません。改めて「命とは何ですか？」と聞かれても、誰も明確に答えることはできません。しかし、皆が命のことは認識しています。では、人は一体いつ、命を意識するのでしょうか。

私は若い頃、動物園に幼児の団体が来た時に実験のようなことをしたことがあります。幼稚園の同じクラスの子どもたちを二つのグループに分け、一方のグループには、ウサギを見るだけで触らせないようにし、もう一方のグループには実際に抱いてもらい、その後、両方のグループに絵を描いてもらいました。すると、見ただけのグループは皆が同じような絵を描き、感想は「かわいかった」と言うだけでした。もう一方のウサギを抱いたグループは、一人一人が異なった点に着目した絵を描き、「暖かかった」、「柔らかかった」、「コトコト音がしていた」など、感想も様々でした。

この二つのグループの違いは何かというと、ウサギを抱いた瞬間に、命が意識されたということなのだと思います。そして、こういう瞬間を何度も繰り返すことにより、命を認識していくのだらうと思います。

○ 「知っている」と「わかっている」こと

旭山動物園では、いろいろな園内ガイドを行っていますが、幼稚園児を対象にした

ニワトリのガイドをやっている時のことでした。園児達がニワトリを触っているのを見ていたある中学生が、自分も触りたいというので触らせたことがあります。すると、彼は、とさかに触った瞬間、「温かい！」とびっくりして手を引っ込めたのです。私が「ニワトリが温かいことを知らなかったの？」と聞くと、「いや、知っていました。鳥類は爬虫類のような変温動物ではなく、哺乳類と同じく恒温動物ですから。」と専門的な説明をするのです。

つまり、「知っている」ことと「わかっている」ことは違うということなのです。いくら知識として知っていても、自分のものになっていないのです。私がお子さんの膝にハムスターを乗せてあげると、心臓がコトコトという音を感じ、とても優しい気持ちになると言っていました。私は、こうした体験の中に命を感じる機会があるのだと思います。知識はあっても、実際の体験に裏打ちされていなければ、本当にわかったことにはならないのです。

○ なぜ命を大切にしなければいけないのか



それでは、なぜ命を大切にしなければいけないのでしょうか。命はこういうものであるということと、その命を大切にすることとは別の問題です。

なぜ命を大切にしなければいけないのだろうと考えた時に、結局、生物というのは、「生まれたら必ず死んでいく」ということを理解することが必要なのだと思います。生物が誕生してから死ぬまでは一方通行で、

決して逆戻りはしません。このことを理解しなければ、命を大切にしようという気持ちが生まれることはないと思います。

動物が死んでもなんともないが、人間が死ぬことはとても辛いことだ、と言う人がたくさんいます。いつも疑問に思うのは、人間の命と動物の命に違いがあるのだろうかということです。私は、人の命を失うことの方が動物の命を失うことよりも辛いのではなく、自分の身近にあった命を失うことが辛いのではないかと思います。自分の命と近い関係にあった命と遠い関係にあった命には明らかに差があります。私は昨年、15年間一緒に暮らした犬を亡くしましたが、自分の親が死んだ時と同じくらい辛い気持ちになりました。命の重みの差は、人間と動物という差ではなく、自分との関わりの度合いによるのだと思います。私にとって世の中の中心は私であり、皆さんにとって世の中の中心は皆さんだということには異論がないと思いますが、そのことから命の重みに差が生まれるのだと思います。

○ 命の実感

私は、子どもの頃からいろいろな生物に囲まれて生きてきましたが、その生物が死ぬまで、明日も一緒に生活する日々が続くと信じていました。生物は必ず死ぬということは知っていたのですが、死んでしまってから初めて、命が絶対に戻らないことを実感しました。そしてその時、同時に「あっ、俺は生きているな。」と、自分が生きていることも実感しました。

私はこれまで様々な生物を育ててきましたが、死んだ時には必ず後悔をしました。生物の死に直面した時に後悔しないためには、その生物が生きている間に、その生物としっかり関わったと思えるような関わり方をすることが必要です。しかし、振り返ってみると、次はしっかり世話をしようと思うのですが、死んだ時にはやはり自分の至らなさを感じました。こうして私は、世話をした全ての生き物が死んだ時も、私を可愛がってくれたおばあちゃんが死んだ時も、親が死んだ時も、友達が死んだ時も、同じ辛さを味わってきました。

命はかけがえのないものであるということを本当に理解させようと思ったら、こうした経験を子どもにさせることが大切ではないかと思います。

○ 40億年の命のつながり

約40億年前、この世界に一つの命が誕生し、その命が数えきれないほどの生物にバトンタッチされ、私や皆さんの中に入っています。地球上にいるすべての生物の命は40億歳なのです。この途切れることなく命がつながってきたということは奇跡的なことです。もし、この40億年の間に、命をつなぐことをやめた個体が一つでもあれば、私達は存在していないのです。

オランウータンとは「森（オラン）の人（ウータン）」という意味ですが、ゴリラやチンパンジーと同じくヒトの仲間です。例えば、ニホンザルの赤ちゃんは、自分で母親にしがみついていることができます。でも、オランウータンの赤ちゃんは、人間の赤ちゃんと同じように、母親が抱いてやらなければ下に落ちてしまいます。このオランウータンを飼育した経験からわかったことがあります。それは、ヒトの子育ては本能ではなく、学習するものだということです。周りのオランウータンが子育てをする様子を見たことのないオランウータンは、自分が出産した時に、どうしてよいかわからず子どもから逃げようとしてしましました。しかし、自分の弟を育てている母親の姿を見て育ったオランウータンは、第一子の時から上手に子育てができるのです。つまり、ヒトの子育ては本能に任せればできるものではなく、学習が必要だということなのです。皆さんは自分の命を生まれてきて当たり前だと思っているかもしれませんが、命

をつなぐということは本当に大変なことなのです。あるオランウータンが子育てができなければ、命はつながっていないのです。命というものは、奇跡的な状況でつながってきているのです。

私達は40億年の命のつながりの結果としての存在であり、すべての生物は歴史をもった存在なのです。だからこそ、人を殺してはいけなし、自分が生きるために他の生物の命をいただくことがあっても、絶対に無駄に殺してはいけません。まして、自分で自分の命を絶つことはとんでもない話です。自分の命を自分だけのものだと思ったら大間違いなのです。命を大切にするためには、このことを理解することが必要です。

○ 動物園の役割

私達人間は、この地球上に数多くの生物と一緒に存在しています。この地球がどれほど奇跡的なつながりの上に成り立っているかを考えれば、地球温暖化などの様々な問題をなんとかしなければならぬと思うはずで、命をしっかりと考えるということは、この命を産みだしてくれた地球を少しでも長く正常な状態にしておきたいという思いにつながると思います。

旭山動物園では、「伝えるのは命」をテーマに、様々な試みを行っています。私は、動物園には、命について、そして地球について皆さんに考えていただく切っ掛けをつくるという役割があると考えています。

皆さんもお近くの動物園へ足を運んでいただき、命や地球について考えてみてください。そして、機会がありましたら、是非、旭山動物園にもお越しいただきたいと思います。

